



観光公害が深刻な由布市湯布院町の湯の坪街道(昨年5月のゴールデンウィーク)

観光公害(オーバーツーリズム)が深刻化している。大分県も例外ではなく、押し寄せる訪日客で暮らしたに弊害が出てくる場所もある。受け入れ地域の住民視点に立ち、持続可能な観光(サステナブルツーリズム)への公助が急務だ。

型のホテルが急増したこともあり、予約で連日満席の料理店も多い。街なかは「食事難民」の市民や旅行者が目立つ。象徴的なのは由布市湯布院町だ。目抜き通りの湯の坪街道(川上)は国内外の旅行者が押し寄せ、慢性的な交通渋滞や多量のごみ放置などさまざまな問題を引き起こしている。観光公害以外の何物でもない。

受忍限度を超えた市は今年1日、「ポイ捨て等の防止に関する条例」を施行し、街道周辺を重点地域に指定した。約60店舗にごみ箱を提供する一方、市職員らが定期的に巡回している。違反者には過料(個人2千円、事業

論説

2025.4.25

旅行者のごみ問題



者5万円)を科す。

ごみのポイ捨ては減ったという声がある。半面、ごみの総量は増えたという見方もある。ごみ箱の存在で本来は持ち帰っていたはずの可燃・不燃物が安易に捨てられ、結果的に多量のごみを産業廃棄物(事業系ごみ)として処理せざるを得なくな

観光過密エリアに公助を

る。痛しかゆしだ。

他の県内17市町村は環境の美化や保全の関連条例こそ定めてはいるものの、過料を科す自治体は多くない。広域に移動する旅行者が地域別の条例を把握するのはハードルが高く、抑止力になっていないと言いが難い。円安で訪日客数は右肩上がり

である。昨年は過去最多の約3687万人が来日した。

大分県がまとめた今年3月の県内宿泊者数(速報値)は外国人が約11万6千人で国内客は約41万4千人。ともに前年同月比や前月比を上回った。政府が掲げる2030年目標の訪日客数は6千万人だ。大分も増え続け

るだろう。

交通アクセスの改善、魅力を伝える情報発信、公衆WiFiなど旅行者にストレスを感じさせないインフラの充実……。国や県はこれまで訪日客誘致に向けた環境整備に力を入れてきた。その結果が招いたオーバーツーリズムでもある。

県の「美しく快適な大分県づくり条例」(04年4月施行)は、ごみのポイ捨てをした違反者に5万円以下の過料を科している。とはいえ過去21年間で該当者はない。条例は形骸化しており、機能を十分に果たしているとは言えない。

ゴールデンウィークが始まるとは言えまい。

る。ごみのポイ捨てなど「問題

がさらに県内で顕在化していけば、何らかの手を打つ必要がある」(県環境政策課)のは当然だろう。観光過密エリアへの公的支援は検討に値する。「サステナブルツーリズム先進県・大分」。それが観光の目玉になれば言うことはない。



〔問①〕 観光公害（オーバーツーリズム）の事例として由布市湯布院町では具体的にどのような問題が起きていますか。

〔問②〕 由布市が定めた条例によってどのような良い面と悪い面があり「痛しかゆし」の状態になっているのでしょうか？

【良い面】

【悪い面】

〔問③〕 持続可能な観光（サステナブルツーリズム）のためにどのようなことに取り組むべきでしょうか。考えてみましょう。また、みんなで意見交換してみましょう。